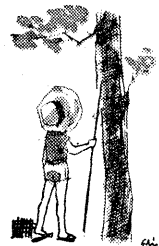


子どもに見る

男女の性分化とテレビ

室 谷 幸 吉



小学校の一、二年生は、男女の性の分化Ⅱ区別のあいまいな中性期なのでであると従来は考えられてきた。多くの子どもたちは、こういう考えのもとに事実、扱われてきた。

子どもたちは満六歳の学齢期を待たず、個人差はあろうが、自分の体と異性の体とのちがいに気づき、大きな関心をもちはじめ

る。
男の子は自分の股の間に突出している器官体をはっきり意識し同じものを持っていない人間（女）もいることに気づく。そしてそれはなぜなのかを頭の回りの早い子どもらは考えはじめる。とにかく人間の中に見出されたこの差異を不思議だなあと思う。

しかし、子どもたちが、生殖器の存在、そのものの形態のちがいに気づいたということだけで、男は男らしく、女は女らしくな

るのか、といえば、決してそうではない。それは形態上のことだけであって、彼らの内面世界——心の領域・意識の世界——では男と女の性的な特異徴候は、それほどはっきりはしていない。

——やっぱり男の子は赤ちゃんのうちからちがうわねえ。泣き声もやんちゃ。声の出し方に張りがあるわ。

——女の子は赤ちゃんのうちからちがうのね。しずかなこと。

というように、笑うこと、泣くこと、立ち歩きひとつにしても、嬰兒や幼児に、男と女のちがいが認められないわけではない。しかしこの頃にみられるちがいは、全く自然発生的なものではない。子ども自身の意識はだいたいにおいて加わってはいない。おとなが子どもらの上に見出して、やれ男らしいの、女らしいのと喜ん

でいる。そういう動作や表象は、実は、子どもの側からいえば「わたしは女である」「ぼくは男である」といった性の自意識の加わらない「おのずから表徴」「ひとりて表徴」であると考えていい。性差にもとづく意図をもたないこの時期の子どもたちは、無性期から中性期の生活体なのだと思えるのは、当を得たことである。

性器のちがいに気づいた、というだけでは、性へめざめた、とはいえないだろう。性へのめざめが、おぼろでアイマイで消極的であるというのが中性期の特徴である。子どもは一般に、七、八歳ごろまでは、性について積極的な姿勢をとるものではなく「意識がそれほど熟していないから」性衝動は睡眠中である、というのが、ごく普通のあり方であった。

ところが最近では、その事情が急速にかわってきた。かわってきたという徴候を、わたしたちの身近にいくつも、しかもたやすく指摘することができる。子どもたちは、無性期から中性期を、かけ足で通りすぎてしまう。従来、生まれてから六、七年かかって、いわばゆっくりとあせらずに中性期を経てきたのに、この頃の子どもは、四、五年で、ちょっと極端な言い方をすれば従来の半分、つまり三年ぐらいて中性期を離脱してしまう。性への関心や意識、それから実際のな性行為が二倍のスピードで形成されるようになった。こういう人間の内実の変性は、はたして喜ん

でいいことなのか、どうか。判断や評価は軽率にはできない。ともかく、子どもたちは、小学一年生にして、男であり男性である、また女であり、女性である、といったくなるのが現今の実情なのである。身体成熟、性成熟の加速現象をそうあらしめるのもその発端を、わたしは、ここにありありと見るのである。

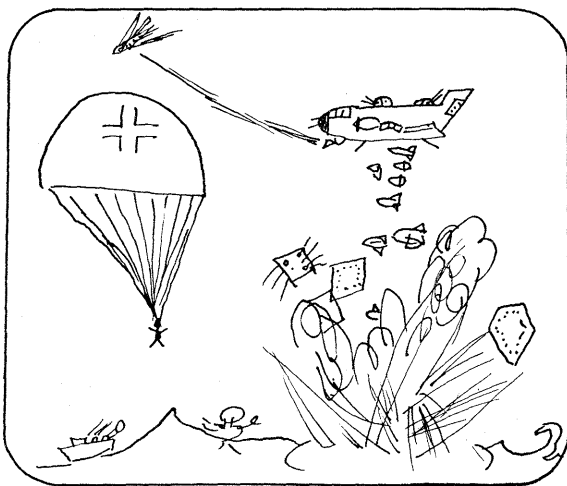
幼稚園児といえば、おおむね四〜五歳の子どもだ。いわばクチバシの黄色いと思われる子どもたちが、女の子のスカートまくりに興じたり、キスごっこだといって、右往左往もする。そして、——ワタチ、アイチテイルアア「わたし、愛しているわ」

——ケッコンチマチョ「結婚しましょ」
など、まだよく回らぬ舌のカタコトまじりで女の子と男の子がダキあったりする。身体的には、見かけどおりに幼いのに、行動的には全くイッチョマエの人間のような、アンバランスを感じさせられる。幼児たちのこうしたやり口に、体「形式」と心「内容・意識」のちぐはぐさ¹¹違和を感じて、あまり好ましいことではないなど、幾分ニガニガしく思うのはわたしだけのことだろうか。しかし、ともかくにも作りごとではない、事実として存在する現象なのである。

子ども社会では、五〜六歳になると、異性に対する関心が顕在化する。男の子は女の子に、女の子は男の仲間に、自分の好みに

合うスキナ相手を物色する。小さなボーイフレンド、ガールフレンドをさがし求める。

——〇〇ちゃんは△△ちゃんがスキなのよ。
——△△くんは〇〇ちゃんがスキなんだってさ。

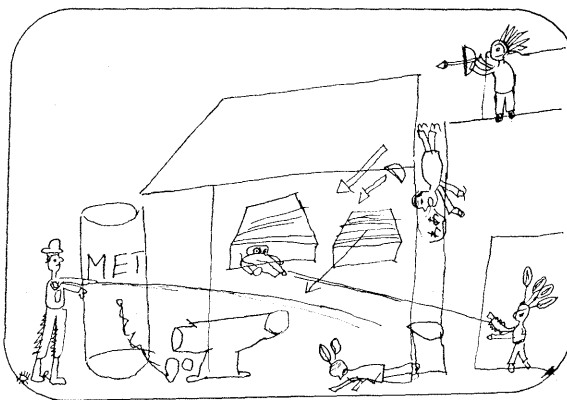


好きなシーン
「いいなあ、ばくげきめいれい(7歳・男)」

(男の子の大部分は戦争や西部劇などの闘争シーンに心をおどらせている。また見たいともいう。)

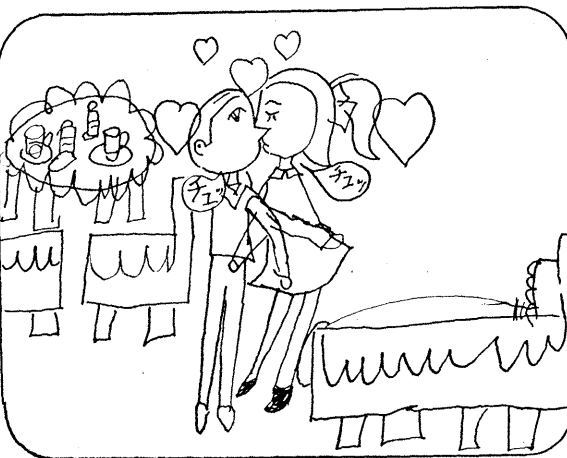
初恋の人となるのだろうか。子どもらの仲間社会での噂話やトモチ話など活発である。

このような幼児たちを、では私たちは、どう扱い、どう導いていったらいいであろうか。手をこまぬいて思案に落ちこんでいた



「西部劇でインディアンとたたかっている。インディアンの方がまけている。(7歳・男)」

「映画でキスしている。こんなシーンはいやです。(6歳・女)」
(子どもは放映されるアメリカ映画も、イヤとはいいなながらも、よく見えています。)



り、反対に、ながめ回しておもしろ、おかしがっているだけですむものでない。

こういう現象「現実」の、因つてきた根源をさぐり、子どもたちの変化の方向に沿って、望ましく、かつ健康な指導の方途を考え出しスケジュール化していかねばならない。

★

性へのめざめに向かって、幼児期から強い刺激・衝撃を与えているのは何か。わたしは、それはテレビだと思う。

もしテレビがなかったら、またもし、テレビがあっても、放送内容に、今日ほどに強い性的提示がなかったら、子どもたちはこのように、驚くほどの性的早熟にはならずすむであろう。

もちろん、子どもたちを性的の世界へいち早くかり立て、追いつみきずり込む働きをしているのは、テレビ一つだけではない……が。

子どもらの一日の平均視聴時間は約二時間半。土曜日とか休日には、八〜九時間も見ている子どももいる。当然、体を動かす遊びや運動はますます少なくなり、見たり、聞いたり生活時間が彼らの日々の大半を埋めてしまう。

毎日テレビに目をさらしている子どもたちに、では、あなたは

どんな場面が好きなのか。心にも目にも残っているのはどういうシーンなのかをきいてみた。

「ああいう場面をまたテレビで見たい」

「あれはカッコよかったな」

「ああいう画面がスキだよ」

そのような子どもの頭に、好感、快感を伴って印象を残している場面のいくつかをあげてみると――

男の子では、まずトップに、西部劇でインディアンと戦っているところ、西部劇でケンカをしている。ついで「巨人の星」で、星がボールを投げたところ。それから「爆撃命令」のような戦闘シーン。またゴジラとかガバラのような怪獣が登場するもの。女の子では、全くといていいほどスキな場面がちがう。先ずスポーツをしているカッコよさがあげられる。「アタックナンバーワン」で試合をしている。ボールを渡すなど。また「サインはV」でのバレーボールシーン、それから「デイズニールランド」のようなおとなしい娯楽もの。一〇一ぴきわんちゃんや「ドナルドダック」といった行き方のものである。

こうあげてきて、誰にもすぐ気づくことは男の子と女の子で、好みに画然とした、あるいは相対立するほどの区別があることだ。一言でひっくりくれば、男の子たちは戦闘的そして女の子たちはオママゴト的でお人形愛撫型。

このような意識や関心の傾き工合から見ても、男女の分化は幼児期にすでにあらわれている。幼児期にすでにあらわれたこのような偏りは、このまま彼らの生涯にわたってそれほど修正を加えられたり変化することなく、保ちつづけられるもののように思われる。

——見ていてイヤだなあと思う。

——あんな場面は見たくないや。

子どもたちが厭悪をいだいたり、忌避したりしたくなるような場面もテレビにはあるだろう。それはどういうシーンなのかをさぐってみると……男の子では、

▼飛行機がついらくした。▼鉄砲でやられている、けどそこへ助けにきた。「キーハンター」▼空中戦でアメリカが負けそうになっている。という工合に、闘争における「負け場面」に「クライ」が集中している。なるほど、争って勝つのは、だれしもカッコいいが、敗色濃いのは、これまただれしも歓迎はしない。

つぎに女の子が見たくないといっている情景は——ここで、男の子と女の子に、相反する嗜好傾向がうかがえる。男の子たちが「カッコいい」と垂涎おかない闘争シーンを、女の子たちの多数は、「イヤイヤ」といって否定したり、強い反発の姿勢を示す。

▼強盗をつかまえて、どんどん死刑にしようとしている。「ニュ

ース」▼ドラキュラが女の人をかみにいく。「ドラキュラ」

▼きちがい、三つの子の頭をけとばしている。「気ちがい映画」▼髪の長い女の人が、二人でけんかしている。といった調子である。

これは男の子と女の子の、志向性の差というべきだろう。男の子たちの攻撃的・積極的なのに対して、女の子たちは、大体において受動的・消極的である。闘争シーンを見る女の子たちの心理は、優勢な方に加担する立場をとらずに、いじめられ、いためつけられる負け方に自分の身を置くのであろう。闘争においては、受身的な立場にあるほどつまらなく切ないものはないはずである。

女の子どもらは概して静的なものを好み、急激で鋭角的な行動や変化は好まないのである。

▼赤オニボンボちゃんがうたをうたっている。あれはまったくだらない。「ママとあそぼうピンボンパン」という声もある。

つぎに女の子たちでは、キス・シーンに対する反発・抵抗が、いまひとつ強く感じられる。

▼女の人と男の人がキスをしている。あれはみたくない。という声がかかりにある。これはどういうわけなのだろう。

好奇をそそられながらの反発——人間はアマノジャクなものでそういう同時矛盾的な気持ちをだれしも持っている。しかもその

傾向は女性に一般的に強い。心の底ではイヤでもないのに、口先だけは「イヤ」と反発する。そうした心理に因る婦結と考えられないだろうか。

子どもたちの、このような性への関心の高揚状態を見ても、性教育の早期からの必要が感じられる。一性性教育というものは、子どもの生誕した時点から、その子に対してこまかな配慮が望まれるのであるけれども、子どもが幼稚園または保育園に入る段階つまり子どもにとって、彼の属する特定な子ども社会がたちあられ、対人関係や行動範囲などが形式的にも広がる時期に達したら、その時はもう子どもに欠かし得ないものとして意図的な性教育が登場したものと知らねばならない。性に関する教育は、日本では、人間教育・学校教育の面でいちじるしく定着化の遅れた側面である。日本人一般に妙なはじらいが強く、なじめないのである。

ところが最近、性教育は降って湧いたように人々の関心をひきつつある。週刊誌によって派手に封切られる性情報の自由化・性的ショックをあてこむえげつないピラ等々、社会に瀰漫する性教育に意図的にタッチしはじめた。「昭45・2月中旬NHK」これがテキストの形で、学校教育に定置されるようになるには、今後数年を要するだろう。学校教育は、おおむね保守的なもので、よろずのことについてお先ッ走りを好まない。ある意味では非常に

腰が重く足ののろいものである。だからといって、テキストとして示されないから、「子どもたち、お前たちも、性への関心はしばらくおあずけにしておくがいい」は、理のとおらぬ話である。性指導が、教材として体系化され指導の方法が確保されるかどうかにはかわりなく、子どもたちの心も体も、日に日に成長し変化の歩みを止めはしない。「テキスト化待ち」などと悠長なことをいっていないで、性教育に対する姿勢、態度を決めることを、世の教育者たちは、時代から、社会から要請されているのである。

テレビションを通して見た現代の子どもたちの心の動向を以上に見てきた。わたしたちはこの中から、いろいろな示唆的なものを読みとることができる。

子どもたちの心というものは、時代なり社会なりを反映しながら、それ自体ひとつの潮流となつて、ゆっくり移り動く生き物だと見ることがができる。子どもの教育に当面する人たちは、そういう子どもたちの心の動向なり潮流なりに、いつも鋭い関心の目を向ける必要がある。そして把握した子どもたちの実体の上には、堅実な養育計画を策定しつつづけていかねばならない。

(明星学園)